國學院大學学術情報リポジトリ

2020年度国際研究フォーラム「見えざるものたちと日本人」報告書

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2025-05-16
	キーワード (Ja): NDC8:302.1
	キーワード (En):
	作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001625

湯殿山信仰のモノ文化における不可視性と秘匿性

アンドレア・カスティリョーニ Andrea Castiglioni
（名古屋市立大学）

1　不可視性と秘匿性における概念ネットワーク

明治５年（1872）に、多くの霊山の出入に関する規則制度が変わり、空間的な解釈が激変した。明治政府は、「神仏判然令」（1868）を始め、「修験宗廃止令」（1872）と「女人結界の解禁」（1872）を通じて、霊山を閉鎖的な空間から解放的な空間への変更を進めた（鈴木 2021, 138–139）。明治政府は、国土の一部にある霊山を宗教的な集団に所属していた僧侶・修験者・巡礼者が管理することを許可せず、国家自体が山岳エリアを国民のために治めることとした。このことは、明治時代の国土地図のなかに霊山における新しい政治的な影響として現われている。このような地図を見ると山の存在感が地理学的な可視性に依存していることが分かる。つまり、国土地図の作図法の言説が、山の神秘的な部分を完全にさらけ出して、測量の力で山を囲い込み、近代の国民へ国土の穏やかなパノプティコンの幻としての概念を伝えた。[1] 明治時代以前は、このようなビジュアル言説と違い、多くの霊山のカリスマは不可視性と秘匿性に基づいて描かれていた。江戸時代の地図を見ると、霊山は全体または部分的に雲の屏風の後ろに隠され、人間の目に触れないことで、地図上では自由に描かれなかったからこそ、霊山が自身の存在感と宗教的な魅力を人間に常に強く感じさせることができたという秘匿性を象徴する事象といえるだろう。

しかし、前近代の山岳信仰で、大切な役割をしていた不可視性と秘匿性の概念と、それらと関係がある宗教的・社会的な現象を考えると、どのような観念のネットワークが具体的に登場するのだろうか。この思想的な問いへの回答を得るために、不可視性と秘匿性に関する研究をしたジョルジョ・アガンベン（Giorgio Agamben）の『散文の理念』*Idea della prosa* とピエトロ・プッチ（Pietro Pucci）の『謎・秘密・託宣』*Enigma Segreto Oracolo* を出発点に考えていきたい。不可視性については、眼球内部の構造を捉えながら、アガンベンが提唱する神経分布と網膜の間に存在する盲点についてフォーカスする。人間の目の中心にある、見えざる点の盲目を、実際には感じさせないために、この盲点の周りで視覚が補うことによって、見ることが成立する。つまり、全ての視覚の真ん中には見えざる点が常に存在しており、この肝心な盲点がなければ視覚は存在することができない。さらに、この目の中にある盲点によって見えるものと見えざるものの間に「遅延」もしくは「隙間」が生じる（Agamben 2002, 115）。アガンベンが考える遅延の概念は、ミシェル・セール（Michel Serres 1930–2019）が考える「ノイズ」の概念と類似していると思う。つまり、あるシステムでは（私たちの場合には宗教言説と考えても良いと思う）「遅延」と

「ノイズ」が立ち上がると、そのシステムが膨らんだり縮んだりすることで、固定したグリッドのシステムから非グリッドであるネットワークに変更することが可能になることを示している（Serres 1982, 12–13）。次に、アガンベンは、盲目の観（vision）の意味と、宗教のなかでも特に密教との関連について論じている。人間は自らの「無表現」（unexpressed）と「無言」（unsaid）に対して常に強い関心を持っているが、これに相当する「盲点・遅延・隙間」を直接見ようとすると、暗闇や虚無しか経験することができない。このような暗闇の危機を脱するために神の概念を発見することになる（Agamben 2002, 116）。

先に述べた不可視性と繋がっている要素について、もう一つ考えることができる。それは秘匿性である。秘密の誕生は、差別の誕生でもある。なぜならば秘密とは、秘密を知る者と、それを知らない・知らされない者の存在があるからである。この秘匿性を興味深く研究したゲオルク・ジンメル（Georg Simmel 1858–1918）によると、秘匿性は「社会的な交尾」であると例えた（Simmel 2009, 46）。つまり、ある秘密の内容をシェアすることによって、全く異なる社会のグループを合併させることができる。このように考えると、一方では秘匿性が社会の構造を切り分け、もう一方では社会の構造を新しく組み立てる力を持っているといえる。したがって、新しい秘密が生まれる度に、その内容が少しでも漏れなければ、そこで終わってしまうことになる。完璧な秘密、つまり「漏れない秘密」は、ネットワークの終わりを意味する。アガンベンが述べている、盲点から生まれる遅延と同じように、秘密がネットワークの成長の起爆剤や可能性になる。遅延と秘密がなければ、ネットワークが停滞に向かうため、枯れてしまう。秘匿性は秘密を生み出すが、秘密は秘匿性を生み出すことができない。では、秘密の本質は何であろうか。秘密の根底に隠れているのはエニグマのようなもので、それを完璧に知ると秘密自体はなくなる。このことは、プッチによると、エニグマが脱構築的な記号（deconstructive philosopheme）であることから、解決される度に新しい謎を生み出す機械（device）になるといっている（Pucci 1992, 10）。アガンベンもエニグマについて分析しており、エニグマは答えの本質を無価値にする問いであると述べている。言い換えると、エニグマは、視覚と言葉による表現の不完全を現すために働いていることを示す。「目の中にある盲点」と「秘密の奥にあるエニグマ」について問いかけることこそが大切であり、それに対するある種の陳腐な回答を越えている。つまり、質問が複雑であることと、回答の陳腐さの間にできるギャップ・隙間・盲点・ノイズによって、現実に関する解釈の可能性が広がると同時に、存在意義も深まる（Agamben 1977, 163–164）。

2　湯殿山のモノ文化が生み出した不可視性と秘匿性

日本山岳宗教の中で不可視性と秘匿性と強い繋がりを持つ信仰を考えると、近世の湯殿山信仰を一例として使用することができるだろう。出羽国（現代の山形県）の湯殿は、湯殿山と称され名前の最後に「山」という文字があるものの、実際には湯殿は聖なる巨岩である。この巨岩は、「御宝前」と呼ばれ、それは山の概念を凝縮する役割を果たしている。

つまり、御宝前は山のランドスケープの換喩、メトニミーになる。それと同時に御宝前は、湯殿の本地仏である大日如来と垂跡神の湯殿権現の媒介としての役割も持つ。この御宝前は、湯殿山の一番の聖なる場所なので、不可視性と秘匿性のオーラに包まれている。現在でも御宝前の写真の撮影は禁止されており、明治以前は御宝前の前まで行くことができる俗人は、男性の巡礼者に限られた。たとえば、この巡礼者たちは、巡礼の時だけ修験者もしくは「一世行人」と言われた湯殿山行者と共に御宝前を参拝することを許された。それ以外に、御宝前と直接触れることができたのは宗教的なプロフェッショナルである真言宗の僧侶と修験者、一世行人のみだった。人々が言葉で語ってはならず、その姿を描くことも禁止された湯殿山のような聖なる山を管理した僧侶・修験者・一世行人たちが、社会へむけてその信仰を流布させるためには、特別な方便を考えなければならなかった。つまり、彼らが湯殿山において、一方ではカリスマの起源となる不可視性と秘匿性を守りながら、他方では、そこに隙間やノイズを用いることで信者に見えざるものをあえて見せることによって、秘密の存在を知らしめた。本論文の冒頭に述べた通り、不可視性と秘匿性の保存か破壊かによって霊山信仰のネットワークは膨らんだり縮んだりすることができ、山岳信仰の特徴である流動性が現れてくる。

さて、湯殿山信仰における隙間・ノイズの二点について、より深く考えてみたい。一点目は、即身仏についてである。現在の湯殿山は日本の「ミイラのメッカ」として知られている。なぜならば、江戸時代の高名な一世行人が死んだ時に湯殿山講の世話人は、石の匱という特別な墓に行者の死体を安置し、ミイラ（すなわち即身仏）にする特別な儀式を行ったからである。つまり一世行人の即身仏が、修験道思想の中にある「即身即仏」の模範を具現化させると同時に、その宗教的な理念の感性化＝ aesthetization（古代ギリシア語の *aísthesis* は「感覚で感じること」）も支える。言い換えると、即身仏の存在によって、人々が未来を現在の記憶として持つことができる（Castiglioni 2019, 45–46）。このことは、湯殿山の大日如来と人々が一体化することを示す。したがって高名な一世行人は自身のミイラ化した死体を通し、湯殿山の信者たちのために、普段は見ることを禁じられた救済の観（vision）を与える。この観は、大日如来と湯殿権現の媒介物として働いている御宝前の見えざる姿と秘匿性を示している。つまり、御宝前の不可視性と湯殿山の秘匿性を身体化させた一世行人の即身仏は、異なる姿としてミイラ化した行者の死体によって、俗人の信者の目の前に救済の観をもたらす。しかし、一世行人の即身仏に関わる儀礼の感性化は「観と目」だけではなく、「感触と手」に基づくものもある。たとえば、湯殿山の延年である丑年に「衣替え」が行なわれる。この時に湯殿山講の世話人は住職と共に即身仏の古い法衣を脱がし、新しい錦の法衣と袈裟を着せ替える。この「衣替え」の儀礼に限り、即身仏に普段からある人々との一定の距離を感じさせるオーラが一時的に無くなる。そして、俗人である世話人たちが自分の崇拝対象である即身仏の身体的な具体性に触れながら、一世行人と湯殿山との結縁を刷新する。「衣替え」の作法により世話人は不可視性と秘匿性に包まれている一世行人の死の儀礼を再演して、臨時で即身仏の可視性と接触性を強調することによって、信者たちと一世行人の間にある持ちつ持たれつの救済契約を復活させる。[2] このような経過により、江戸時代から現代に至るまで湯殿山信仰のネットワークは、聖なるカ

図１　湯殿権現と空海の邂逅、19 世紀、紙に墨。著者蔵。

リスマの起源である秘匿性を保持したまま広がることができる。

一世行人の即身仏だけではなく、湯殿山の聖なるモノ文化（sacred materiality）も不可視性と秘匿性に基づいている。二点目は、湯殿山信仰のモノ文化について紹介したい。たとえば、湯殿山講員が持っていた掛軸には、自由に描くことができなかった湯殿山の御宝前を雲の屏風の後ろに隠すことで、その聖なる場所を喚起した。このように、湯殿山系の掛軸は「直接の観」ではなく「斜めの観」にすることによって、御宝前の不在と秘匿性を守りながら、その不在ゆえの存在感を現す。湯殿山系の掛軸の中で頻繁に登場するシーンとして、湯殿山の開山をしたと伝えられている空海（774-835）と湯殿権現の出会いがある（図 1）。一世行人の姿で現れた湯殿権現は、御宝前の上に浮かぶ赤い蓮華坐に立ちながら、空海の祈願を受け、僧侶に大梵字川を渡ることを許す。御宝前の姿は、湯殿権現の蓮華坐の下から出ている白い霧に相変わらず隠れ、不可視性としての存在を示す。湯殿山縁起によると、空海でさえ開山の目的地だった御宝前に辿り着くまで数カ月かかり、一世行人と同じような修行をしなければならなかった。このことから、大梵字川の岸に描かれている四角い物は、空海によって使われた行屋もしくは護摩壇と推察される。さらに、この神秘的な出会いは湯殿山大日如来の垂跡神である湯殿権現から空海への斎念仏の口伝を表し、湯殿山講員の宗教的な活動に正当性を与えるため大事な役割を果たした（Castiglioni 2020, 217）。この正当性の中心は、御宝前の不可視性と秘匿性から生じて、湯殿権現の形になり、空海を通し、俗人の信者である湯殿山講員まで届いたこととして解釈された。

文字のみの掛軸の場合にも、湯殿権現の姿を文字として表現することによって、実際の姿を描くことなく山の神を文字化し、神の根本的な不可視性を示す。さらに、場合によってこのような掛軸の作者は高名な一世行人自身であった。「千日行」という山籠の修行を終えたばかりの行の力を十分に身に付けた一世行人は、筆・墨・紙を触りながら、湯殿権現の掛軸を描き、自分の身体と権現の身体を融合させ、掛軸の形でこのような徳を講員に与えた。つまり、湯殿山系の掛軸は、秘匿性が高い湯殿権現の身体と一世行人の清めた身体の習合を現しており、モノと人間の物理的な次元を通し、不在による存在の顕在化を具現する。その結果、御宝前の不可視は掛軸のマテリアリティと一世行人の身体により視程に変化することが可能である。場合によっては、行者の身体のみならず龍のようなハイブリッドな動物の身体も湯殿権現と御宝前の不在と不可視の媒介者として働く。たとえば、1826

年から1873年にかけて宗教的な活動をしていた高名な一世行人の蓮海上人が描いた掛軸では、龍の字体はその神秘的な動物のしなやかな姿を想起させ、湯殿権現を喚起しながら御宝前のお湯に温まる蛇の姿も思い浮かべることができるだろう（図2）。

図2　龍としての湯殿権現、蓮海上人作、19世紀、紙に墨。著者蔵。

3　結び

結論として、不可視性と秘匿性が宗教言説のきっかけとして働く大切な要素であると解釈することができるだろう。瞳は、暗闇の瞳孔の周りに虹彩がある。瞳の暗闇と同様に、宗教言説にも見えざるものが存在するからこそ、その周りに渦巻いている言説が暗闇を顕在化させ、たくさんの信仰の形を作りだす。見えることと見えざることの間、つまり存在と不在の中間に、モノや身体が媒介者として登場し、宗教言説の伝播を支えていると言えるだろう。

湯殿山のエッセンスである御宝前は感覚器官を通した直接的な知覚から離れても、宗教言説から消えるものではない。湯殿山信仰の中心である御宝前の存在は、本論文で述べた通り、即身仏や掛軸の図から生み出された間接的な知覚の力で再形成され伝播することもできる。思想学とモノ学論（materialist theory）により、不可視性と秘匿性を仲介する人間と非人間（つまり、モノ）の身体の役割が明らかになると同時に、このような媒介者の非中立（non-neutrality）を理解することもできるだろう。湯殿山信仰の中で大切な役割を果たす即身仏と掛軸という媒介物は、湯殿山に関する概念、教義と実践を伝えるだけではなく、再考するためのトリガーでもある。言い換えると、不可視性と秘匿性が繋がっているモノは、批判的または革命的な機能を常に備えている。なぜならば、人間の感情に訴えるモノの全ては、人間の思考を変化させる力を持つからだ。

江戸時代の湯殿山信仰の場合には、御宝前の不可視性と秘匿性を伝えるために働いていたモノが、湯殿山に関する思想と宗教的な実践のネットワークを常に新しく作り、この山岳信仰に対するハイブリッド性ももたらした。たとえば、湯殿山信仰の流布を支えたモノは、東北から関東または関西の広い地域に住んでいた湯殿山講員のローカルな宗教生活に浸透し、目に触れることができない御宝前の聖なる不可視性と秘匿性を伝播しながら、現地の信仰の要素も取り込んだ。さらに、モノ学の転回（material turn）のおかげで、モノが宗教思想の具体化（embodiment）として捕らえられるのみならず、儀礼の時に行われる人間とモノのトランスヒューマン的な相互作用を分析することも可能にする。今後は「見えざるものたち」を出発点にし、それらの不可視性と秘匿性と関わる媒介物を検討しなが

ら、アクターネットワーク理論で山岳宗教だけではなく日本宗教全体を再考することができるだろう。

【注】

1　興味深い点は、明治時代の巡礼者が霊山に行くために使った鉄道地図には、場合によって霊山の地理的な位置が未だに雲の後ろに描かれ、印刷されてない白い空間に存在している。このような例は、霊山の近代性に対する反発の継続と解釈できるだろう。

2　江戸時代にも、即身仏の衣替えの儀礼が行われたかどうかについては不明である。明治以降に衣替えの痕跡がある。2021 年 7 月 28 日（土用丑の日）の午後 6 時より酒田市の海向寺に所属した二人の高名な一世行人である、忠海上人（1697–1755）と圓明海上人（1767–1822）の即身仏の法衣が新しく替えられた。その時に、海向寺の住職である伊藤隆文氏とご家族 2 人、世話人 10 名（男性 8 人）が儀礼を行った。世話人の女性 2 名は、受付所で一世行人の即身仏から脱がせた法衣を小布にし、お守りを作った。古い法衣は長年即身仏の体に密着していたため「接触舎利」として考えられる。今回筆者と鈴木正崇氏も衣替えに参加した。上記の解釈はこのフィールドワークに基づいている。参加を許可してくださった伊藤隆文氏に感謝する。

参考文献

Agamben, Giorgio. 1977. *Stanze: La parola e il fantasma nella cultura occidentale.* Torino: Einaudi.

———. 2002. *Idea della prosa.* Macerata: Quodlibet.

Castiglioni, Andrea. 2019. “Devotion in Flesh and Bone: The Mummified Corpses of Yudono Ascetics in Edo Period Japan.” *Asian Ethonology* 78–1: 25–51.

———. 2020. “The Shape of Devotion: Mounds, Stelae, and Empowerment Ritual Fasting in the Early Modern Cult of Mount Yudono.” In *Defining Shugendō: Critical Studies on Japanese* Mountain Religion, eds. Andrea Castiglioni, Fabio Rambelli, and Carina Roth, 205–217. Bloomsbury.

Pucci, Pietro. 1996. *Enigma Segreto Oracolo.* Pisa, Roma: Istituti Editoriali e Poligrafici Internazionali.

Serres, Michel. 1982. *The Parasite.* Translated by Lawrence R. Schehr. Baltimore, London: The Johns Hopkins University Press.

Simmel, Georg. 2009. *Sociology: Inquires into the Construction of Social Forms,* vol. 1. Translated and edited by Anthony J. Blasi, Anton K. Jacobs, Mathew Kanjirathinkal. 1908. Reprint, Leiden, Boston: Brill.

鈴木正崇 2021『女人禁制の人類学　相撲・穢れ・ジェンダー』京都、法蔵館。